

かつて日本の商人は、「道義なき商売は家業に災いをもたらす」として、商道徳を重んじ、ただ儲けるのではなく、「正直」や「信用」を大事にしてきました。

石田梅岩は、自分だけの儲けを追求するあまり周囲を省みないのは、人の道に外れるだけでなく、自滅の道をたどると説きました。正直を旨とし、客が納得のいく商売を心がけ、適正利潤を得て儉約に励めば、皆が幸せになるといっています。

梅岩の石門心学は、全国の商人の精神的な支えとなりました。近江商人の教え「先義後利」（道義を優先させ、利益を後回しにする者は栄える）を商売の基本原則としてきた我が国は、「商道」という倫理観を作り上げてきました。それは民族の総合体験の成果であり、伝統文化としての誇りでもあります。

経済を主題とした著作を日本で初めて刊行したのが井原西鶴です。元禄時代初頭の貞享五年（一六八八年）に著した、各巻五章、六巻三十章の短編からなる浮世草子『日本永代蔵』の「煎じよう常とは変る問葉」の中で、金銭にまつわる人間模様と、普通の商人がいかにして長者になっただかを描いています。

また薬の処方に喩えて、長者になるための心得も述べられています。

「朝起」朝早く起きて働く。早く店を開ける。

「家職」本業から外れず、本業に精を出す。財テクや本業以外のことで儲けよ

道義・道徳に則った 商道を後世に遺す



え・栗木 映

うとしない。

「夜詰」夜遅くまで働く。

「始末」儉約の意。無駄をなくし金や物を生かして使う。後始末を良くする。

「達者」自分だけでなく、家族・社員健康管理をする。

以上の五項目は、商人として心得るべき生活規範です。

西鶴は他の著作で「算用」と「才覚」が重要とも述べています。

「算用」とは適正な経理のことで、収入を計り、支出を制するという、経営の原点のことです。「才覚」は知恵と工夫のこととで、人まねではないオリジナルのものを作り出す能力のこと。その才覚の一つに「物には時節」と記して、タイミングを捉えることも重視しています。

（『大商人の金言』八幡和郎著、三笠書房参照）

梅岩、西鶴ともに、現代の経営に資する金言を遺してくれました。その内容は私たち現代人にとって目新しくはなくとも、江戸時代の昔から「商売（経営）の王道には変わりがない」ということを改めて確認させてくれます。

倫理法人会は、確かな倫理観を世に確立しようとしています。一人ひとりの実践と繁栄が、確かな倫理を築く礎となります。先人より学びを得、後生に学びを遺す。「倫理経営」の粋を世に遺すためにも、私たちは知恵と汗と努力に満ちた経営をしていきましょう。それがひいては、自社の繁栄にもつながっていくのです。